

空のスポーツ

兼平 佳津子 青森

戦争は八月にだけ語られる八月だけでも語りてゆかな
この歳になりてはじめて知るひとつ相撲は秋の季語なりしこと
槍投げは太古の時代からと聞く北口榛花の腕が伸びる
スケボーは空のスポーツ 舳斗雲に乗った悟空の気分になれさう
スーパ一の会計きつかり五千円論吉を出して梅子が来たり

老い止め

中津川 靱 埼玉

飽きぬこと一には黙慮二に短歌三と四なくて五に草むしり
酔ひ止めにトラベルミンがきくやうに老い止めによく効きをり短歌
身を振りくの字に皺む足マツト踏まれ苦しむわが子よ世の子よ
祭りの夜すれちがひたるをみなごの浴衣の袖とふれぬ小肘が
庭に干す雨傘・日傘風うけて転がるころがる、さやうなら夏

密かごと

宮内 博子 埼玉

黙禱を失念したる終戦日ゆきひら鍋をひどく焦がしぬ
さわがしき令和初秋の米騒動味噌ト少シノ野菜ヲタベヨ
密かごとたつぷり孕んでゐるやうなひつじぐも群る永田町の空
雨柱妖しくのびる秋の午後 政治家九人がゑがほでならぶ
ひとりでも月見は月見帰路に購ふドライブスルーの月見バーガー

鯨塚

近藤 哲夫

神奈川

その長さ九間一尺寛政の世の品川沖に鯨まよひ来
天王洲で捕らへられたる背美鯨ひとめ見んとて市中沸きたつ
くぢら絵の団扇、手拭ひ売り切れて鯨フィーバー江戸をかけぬく
家斉の上覧とあれば縄かけて曳かれゆきたり浜離宮まで
ちから尽きし鯨あはれみ江戸びとはへ鯨塚を建つ海道ぞひに

窓の秋

松下 菜水

神奈川

借金が嵩み追はれて別居せる夫は消息不明となりぬ
エジプトの王のごとくベランダに立ちて大河の氾濫を見つ
遠鳴りのヴィオラ・ダモーレ 離ればあなたの愛が聞こえるかしら
授業中その比喩どほり船を漕ぐ子がひとりをり今、海は風
教室の机のうへのタブレットから眼を上げて見よ窓の秋

夏を終らす

浅田 みどり* 東京

この夏の猛暑は蟬も黙らせて八月下旬初蟬を聞く
「我逝かば花な手向けそ」と詠いたる天心の墓所に野辺の花揺る
つほみ、牡丹、松葉、散り菊ゆびさきに火の花ともし夏を終らす
台風の雨に倒され伏せしまま胡瓜は太き実を育みぬ
人生の目標のごと壁のごと立ちはだかりき一の倉岳

類なきひと

横山裕子 富山

空海の手触れしならむ金銅の密教法具の放てる光輝
空海の深紫の曼荼羅とわれを結ぶにほどよき明かり
空海とふ類なきひとあらはれし九世紀日本の気運をしのぶ
三姉妹高野につどひ清らなる声明聴きしひと夜のありき
海中に生れし生命のみなもとに帰る心地す雨夜の闇は

母の部屋

今井由美子 岐阜

秘められた心情のあらむ川岸を真赫く染めて咲くヒガンバナ
今欲しいものは何にもないと言ふ九十五歳の母はすこやか
おもひでをつぎ足すやうにほろほろと懐メロ流れてゐる母の部屋
「派手すぎでないね？」はにかむやうに問ふ小花散らしたブラウスの母
マイカップ持つ母の手の手の小さくて紅茶の香りさらに際だつ

ひとかけらの麩

三沢左右 兵庫

落語会はねて駄まで四半時あるく道辺を夏の虫鳴く
水筒に茶を足して飲む深夜一時ひとかけらの麩となりたる心地
閉店の二時間のちのスパアの両目とぢたるやうな粧
台風は大転回す象駆りてピレネー越えしハンニバル・バルカ
台風におどろくことのなきままに生まれて死ぬのだらう鯨は

海岸清掃

中村麗子 鳥取

茄子の葉の虫取りしのうち眼筋ののびをさせをり青き海見て
透ける翅をかこむ蟻らの行列の整然として猛暑はつづく
波音と潮の匂ひに蒸し暑さすこし遠のく海岸清掃
しろじろとプラスチックの照る浜の先にひろがる青き日本海
一歩づつ踏みゆく場所をしかと見る濡れ石の浜にゴミ拾ひつつ

被爆の楠で

秋野愛実*山口

この橋はボロボロだけど私より少し歳下なかま中蛭地橋むしちばし
岩国を飛行機飛ばせば町中が分厚い音の壁に圧される
芸備線の座席の隅にルリシジミどこから来たか羽閉じたまま
夜風絶えコーヒーゼリーのような闇午前一時に夫釣りに行く
京橋川側の被爆の楠くすで啼くツクツクボウシの透きとおる羽

キケンナアツサ

池田毅 福岡

一人また一人担架で運ばれて甲子園けふキケンナアツサ
娘より日傘もらひぬ刺すやうな直射日光防ぐ盾なり
灼熱の日差し日傘で防ぎつつ酷暑の朝を職場へ向かふ
伊佐小町ソーダで割ればこの夏の猛暑シュワツと弾けて消える
響く響く空襲警報めいて響く地震知らせるスマホのアラーム